

平成20年度病害虫発生予報第6号

平成20年8月7日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要 [参考]

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	平年並	少ない
		紋枯病	-	少ない
		ニカメイガ	平年並	やや少ない
		セジロウンカ	-	やや少ない
		トビイロウンカ	-	少ない
		斑点米カメムシ類	-	多い
ダイズ	ダイズ	コブノメイガ	平年並	少ない
		紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	平年並
果樹	ナシ	カメムシ類	平年並	やや多い
		黒斑病	-	平年並
		ハダニ類	-	やや多い~多い
	カキ	シンクイムシ類	平年並	やや多い
		うどんこ病	平年並	平年並~やや多い
	リンゴ	炭疽病	平年並	平年並
		カキノヘタムシガ	平年並	やや少ない
果樹共通	斑点落葉病	平年並	平年並	
野菜	ネギ	ハダニ類	-	やや多い
		カメムシ類	-	多い
		軟腐病	平年並	平年並
		白絹病	平年並	平年並
		黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	平年並	平年並
	ナガイモ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
	シバ	ヤマノイモコガ	平年並	やや多い
		ハダニ類	平年並	やや多い
	キャベツ・ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
スジキリヨトウ		平年並	平年並	
シバツトガ		平年並	平年並	
		ハスモンヨトウ	平年並	平年並
		ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)	平年並	平年並

気象予報 (抜粋)

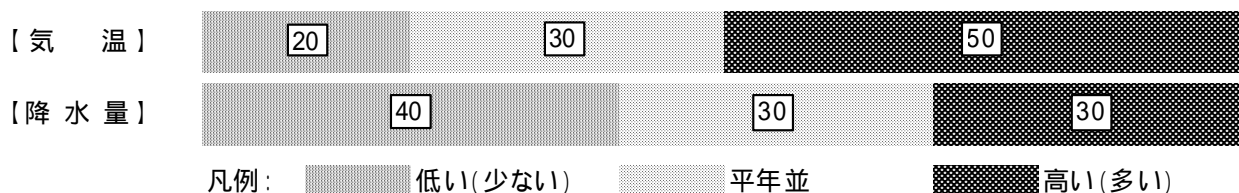
1か月予報(8月2日~9月1日:8月1日、広島地方气象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量などの確率は以下のとおりです。

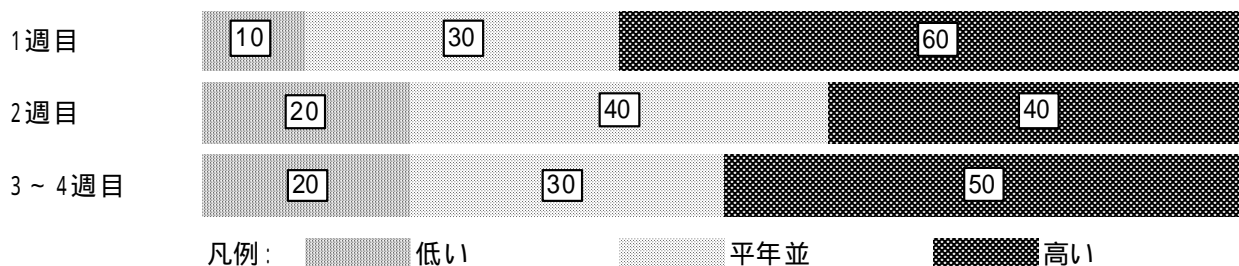
平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

週別の気温は、1週目は高い確率60%、2週目は平年並又は高い確率とも40%、3~4週目は高い確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

[イネ]

1 いもち病(穂いもち)

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

- ア イネの出穂期は平年並と予想される。
- イ 7月下旬現在、現地ほ場における葉いもちの発生は、平年に比べて少ない。
- ウ 梅雨明けが平年に比べて早く、その後も概ね好天で経過していることから、葉いもちの発生は一部の中間地～山間地に限られ、病勢も停滞している。
- エ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は助長されない。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 穂いもち防除は予防防除を基本とする。
- イ 粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃期に散布する。
- ウ 出穂していない中生品種などで粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して水面施用する(湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める)。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地ほ場における本病の発生は、平年に比べて少ない。
- イ 8月1日現在、県予察ほ場(鳥取市橋本)における発生は、平年に比べて少ない。

ウ イネの茎数は平年並である。

エ 向こう1か月の気象予報によると、平年と同様に、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期頃までに防除を行う。なお、コシヒカリの防除の目安は、穂ばらみ期の発病株率が18%程度とする。

イ 残暑などにより病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、粉剤などにより追加防除を行う。

3 ニカメイガ(第2世代)

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は平年に比べて少ない。

イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年に比べて少ない。

ウ 第1世代幼虫の発育はほぼ平年並である。

エ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生は助長される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、8月上旬に心枯茎率1.5%以上又は被害株率10%以上の場合、8月中旬(第2世代幼虫の発生最盛期)に防除を行う。

イ 近年、一部の地域では発生が増加傾向にあるので、ほ場の発生動向に注意する。

4 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域(特に平坦部)
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬現在、予察灯への総誘殺数は平年に比べて少ない。

イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年に比べてやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生は助長される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬の要防除水準は、成幼虫数10頭/株である。要防除水準を超えているほ場は、粉剤などを使用して直ちに防除を行う。

5 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	平坦部
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月第5半旬現在、予察灯への総誘殺数は平年に比べて少ない。

イ 7月下旬現在、現地ほ場での発生は確認されていない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生は助長される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意し、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。

イ 8月中旬頃の要防除水準は、成幼虫数1頭/株である。要防除水準を超えている場合は、粉剤などを使用して防除を行う。

6 斑点米カメムシ類（平成20年7月23日付、病害虫発生予察注意報第5号発表）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 多い

（2）予報の根拠

ア 7月中旬現在、巡回調査定点の水田畦畔及び水田周辺のイネ科雑草地におけるカメムシ類の発生は、平年に比べて多かった。

イ 7月下旬現在、出穂期～穂揃期を迎えた現地ほ場におけるカメムシ類の発生は、平年に比べてやや多かった。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の水田への飛来、イネへの加害活動に好適な条件となっている。

（3）防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第5号を参照。

7 コブノメイガ

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 少ない

（2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場における本種の発生はほとんど確認されていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生は助長される。

（3）防除上注意すべき事項

発生が多いほ場では、被害発生初期（8月中旬頃）に粉剤などを散布する。
なお、粒剤で防除する場合は、次世代の発蛾最盛期（8月上旬頃）に散布を行う。

【ダイズ】

1 紫斑病

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

開花期の25～30日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

2 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる7月第1～6半旬までの総誘殺数は、県予察ほ場（鳥取市橋本）、鳥取市河原町、湯梨浜町の3地点とも、平年に比べてやや少ない。

イ 平年並の8月第2半旬以降に、幼虫による被害が発生し始めると予想される。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生は助長される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）あるいは粉剤などのスポット散布が有効である。

イ 幼虫が老齢になると薬剤の効果が十分得られないため、早期発見と早期防除に努める。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬現在、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの予察灯への総誘殺数は平年並である。

イ 大豆の開花期は平年並となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生は助長される。

(3) 防除上注意すべき事項

開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤などを使用して防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量	平年並
-----	-----

(2) 予報の根拠

ア 7月17、18日に巡回調査を行った果実の除袋調査の結果によると、県内の平均発病率は、3.0%（平年：5.1%）であり、平年をやや下回った。また、新梢葉の平均発病率は3.1%（平年：4.3%）であり、平年をやや下回った。しかし、一部で発病の多い園が認められている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液、8月中～下旬にアミスター10フロアブル1,500倍液又はストロビードライフフロアブル3,000倍液を散布する。

2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

（1）予報の内容

発生量 やや多い～多い

（2）予報の根拠

ア 7月中旬に行った巡回調査の結果、カンザワハダニの平均寄生葉率は0.0%（平年：6.3%）、1葉当たりの雌成虫数は0.0頭（平年：0.2頭）で平年と比較してやや少なかった。一方、クワオオハダニは13.2%（平年：12.3%）、1葉当たりの雌成虫は0.4頭（平年：1.2頭）で平年並の発生となっている。

イ 8月上旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるクワオオハダニの1葉当たりの雌成虫数は、は4.3頭（平年：0.0頭）と平年と比較して多い。

ウ 現地のナシ園では、クワオオハダニを中心に密度が高いほ場が散見される。

エ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の増殖に好適である。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、枝を洗うように丁寧に薬剤散布する。

イ 薬剤の散布にあたっては、連用を避けて輪番散布する。薬剤はコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。なお、収穫期が近づいているため、薬剤の散布にあたっては農薬の使用基準を遵守する。

3 シンクイムシ類

（1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は平年並～やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は、平年並の8月下旬頃と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 薬剤はDDVP乳剤50の1,000倍液、アグロスリン水和剤2,000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。

[カ キ]

1 うどんこ病

（1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並～やや多い

（2）予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にストロビードライフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のカキ園(富有)での発病は、ほぼ平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にストロビードライフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液などを散布する。

イ 現在、発病の認められている新梢及び果実は、見つけ次第取り除く。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(鳥取市河原町)の予察灯におけるカキノヘタムシガ第1回成虫の総誘殺数は少なかった。

イ 第2回成虫の発生最盛期は平年並の8月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスミチオン水和剤40の1,200倍液などを散布する。多発園では8月15日頃にアグロスリン水和剤2,000倍液などを追加散布する。

[リンゴ]

1 斑点落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のリンゴ園での発病は、ほぼ平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は8月上旬(早生種収穫前)にストロビードライフロアブル3,000倍液を、8月下旬(早生種収穫後)にオキシラン水和剤800倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)では平年並の発生となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の増殖に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が認められた場合は、コロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液などを散布する。

[共通(ナシ、カキ、リンゴ)]

1 カメムシ類(平成20年7月11日付、病害虫発生予察注意報第3号発表)

(1) 予報の内容

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 7月31日、8月1日に行ったナシ園における巡回調査の結果、平均被害果率は0.4%(平年:0.7%)であり、ほぼ平年並の被害であった。

イ 7月下旬現在、予察灯などにおけるチャバネアオカメムシ、クサギカメムシの誘殺数は平年並~やや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の加害活動に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

野菜

[ネギ]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギが傷つくような無理な土寄せ及び追肥などの作業で発病が助長されるので注意する。

イ 最終土寄せ前にナレート水和剤1,000倍液を散布する。土寄せ後にコサイドDF1,000倍液又はZボルドー500倍液を7~10日間隔で2~3回散布する。

2 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月下旬までに最終土寄せをする作型では、最終土寄せ前にリゾレックス粉剤10a当たり20~30kgを畦の両側から株元に散布する。
- イ 最終土寄せが9月以降の作型では、8月上旬にモンカット粒剤の10a当たり4kgを畝の上側から株元散布する。又は、モンカットファイン粉剤20DLの10a当たり10~15kg、フロンサイド粉剤10a当たり15kgなどを畝の両側から株元に散布する。
- ウ 8月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元に散布する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 本病は気温が25前後で、降雨が多い場合に多発する。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、肥培管理に注意する。
- イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、粒剤ではダントツ粒剤3~6kg/10a株元散布、散布剤ではアグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000~2,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤(アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤)400倍液の株元灌注も有効である。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は境港地区を中心にやや多い。
- イ 県内全般に、被害の多いほ場が散見される。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は引き続きやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、粒剤ではダントツ粒剤3～6kg/10a株元散布、散布剤ではアドマイヤーフロアブル2,000～4,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、ハチハチ乳剤1,000倍液、ランネート45DF1,000～2,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤(アルバリン顆粒水和剤又はスタークル顆粒水溶剤)400倍液の株元灌注も有効である。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬における、県予察ほ場(北栄町)でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場における発生は平年並～やや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬現在、幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、ハチハチ乳剤1,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 8月上旬現在、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 8月の薬剤防除には、ダコニール1,000の1,000倍液(ムカゴにも登録あり)、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを予防散布する。

2 ヤマノイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

- イ 7月下旬現在の現地調査ほ場における幼虫の発生量は、平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多くなると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は、高温乾燥条件及び風通しの悪いほ場で被害が増加するため、早期発見に努める。

イ 防除薬剤は、アタブロン乳剤2000倍液(ムカゴにも登録あり)、トレボン乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)などを7~10日間隔で2回程度散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多くなると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生が増加する。薬剤防除は、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので丁寧に散布する。

イ 防除薬剤は、コテツフロアブル2,000倍液(ムカゴにも登録あり)、コロマイト乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)、ニッソランV乳剤1,000~1,500倍液などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少なく、現地調査ほ場における発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液(野菜類で登録あり)などを使用する。

[シバ]

1 スジキリヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における若齢幼虫による白化葉はみられておらず、卵塊数はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 卵のふ化直後の8月上~中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6~9kg又はオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。

イ その後も幼虫の発生がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における若齢幼虫による被害は平年並～やや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 成虫の発生ピークは、平年並の7月下旬～8月上旬頃と予想される。

イ 8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6～9kg又はオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。

ウ その後も幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 夏期の高温乾燥条件で多発しやすい。また、中齢幼虫以降は薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期の防除を徹底する。

イ キャベツの防除薬剤は、トルネードフロアブル2,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの防除薬剤は、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

2 ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイムシ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において幼虫の被害はほとんどみられていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は高温少雨、残暑の厳しい年に多発生し、内部の未展開葉や生長点部が食害されるので注意する。

イ 育苗施設では、防虫寒冷紗被覆(網目1.5mm以下が好ましい)を実施し、害虫の侵入を防ぐ。

- ウ キャベツの防除薬剤は、BT剤（エスマルクDFの1,000倍液など）、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。
- エ ブロッコリーの防除薬剤は、BT剤（チューンアップ顆粒水和剤）の2,000～3,000倍液、プリンスフロアブル2,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。（<http://www.famic.go.jp/>）

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果（野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類）、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所
〒680-1142 鳥取市橋本 260
TEL：0857-53-1345、FAX：0857-53-5647
E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、8月21日（木）の予定です。